

熊野の観光地化の過程とその表象

Process of Transformation of Kumano as Tourist Site and its Representations

神田孝治

KANDA Koji

- ①はじめに
- ②国立公園の指定と熊野表象の変容
- ③リゾート地から世界遺産への変容と熊野の表象
- ④まとめ

【論文要旨】

本稿では、熊野の観光地化の過程における表象の変化について、関係した諸々の政策・制度に注目して考察した。まず近代期の熊野については、当初は瀨峡と那智の滝の風景に代表されていたものが、昭和11（1936）年指定の吉野熊野国立公園の選定過程において熊野海岸と瀨峡の風景が目されるようになり、さらに戦中期には高野山と共に国家・天皇制と関係する霊地・史蹟に焦点があてられるようになっていたことが認められた。そして戦後の和歌山県における観光政策において熊野は、海岸風景地から次第に高野山と結びつけられて熊野三山を中心とする文化的資源として考えられるようになり、昭和61（1986）年には海岸部と切り離された内陸の高野熊野リゾートエリアを構成するものとして位置づけられていたことが判明した。また、1970年代後半から歴史の道として調査が進められた熊野参詣道が、1990年代には余暇空間として注目されるようになり、平成11（1999）年の南紀熊野体験博においては熊野古道がリゾートのシンボル空間とされていたことも確認された。そして、これを契機に熊野の世界遺産登録への動きが生じ、霊場と参詣道というキーワードでそこが吉野・大峯や高野山と結びつけられると同時に、アジア・太平洋地域における信仰の山という世界遺産としての意味づけから、熊野は紀伊山地の中の霊場と表現されるようになったことが認められた。これらから、熊野はその観光地化の進展にともない、異なる社会的コンテクストによって生み出された政策・制度の影響を受けるなかで、それが表象する空間的な範囲や風景、そして意味といったものが時代により大きく変容していたことが判明した。

【キーワード】 観光地、表象、国立公園、リゾート、世界遺産